

武市春男先生に捧げる

学問研究に、学生の指導に、日夜倦むことを知らず、後輩に手を差し延べ、同僚・先輩の世話をして疲れの色を見せず、文字通り東奔西走に明け暮れていたかに見えた、あの元気一杯の武市先生が、忽焉として逝かれた。誠に痛恨の極みである。奔流の如く流れに流れていた川が突如として消え去ったような、そんな空漠の念に襲われるのは私だけではあるまい。

先生の生涯を、もし川の流れにたとえるならば、先生は常に急湍の如き日々を送っておられたように思われる。時に岩を噛む激流となり、時に滝となって、しぶきを上げる、そんな思いをしばしばしたものである。ところが、この一、二年、先生と話している時、フト深く澄んだ碧潭の如きものを感じさせられることがあった。これは、全身全霊を打込んで身を持し、世に処してきた人が、人生の究極において到達する、あの完成された人間の境地に似ていると思う。武市先生は、いまや奔流を出て、まさに碧潭にも似た、測り知れないまでに深く澄み切った境地に到達したところで、逝かれたように思われてならない。惜しみても余りある気がする。

武市先生は、早くより教育行政における有数の練達の士として、教育界に幾多の業績を残され、また本学の創立にも参与され、経済学部を今日あらしめた功績は、人のよく知るところである。しかし先生は、それにも増して学問研究を自己の使命と感じて居られたのではないかと私は思う。ある時二人でお茶をのんでいた時のことである—「私は法則を発見しようと思う。自然科学でのニュートンのように。それが学問する者の使命だ」—この先生の言葉に、私は思わず息をのみ、暫くは声が出なかった。社会科学に志す者で、これだけのことを言い切る人を私は初めて見たからである。偉い奴だと思った。真の意味における学問への尊い情熱と執念が武市先生の一生を貫いていたことがわかる。汗

牛充棟もただならずという言葉通り龍大な先生の著書・論文の中から、いつの日にか、誰かによって「武市法則」が発見されることを希ってやまない。

「東南アジア法の研究」—これは武市先生の古稀を祝うため、門下生、友人、知人が編んだ記念論文集の表題である。珍しいことに、この本には、贈られる人、武市先生の「あとがき」がある。そしてそれが、しかも書物の上での先生の絶筆になってしまった。私はこの本の題名を見て思い出すことがある。企業が国際取引で国際契約を締結することが多くなったが、その *agreement* の最後に一条の紛争条項を付け加えるのが慣例になっている。ところがその条項を本当に理解しているものは日本の弁護士にもほとんどいない。こんなことを話した時、先生は「私はかねてから、自分の最後の研究テーマとして *international commercial law* を考えている」と言われた。先生がこの古稀の祝いの書を手にした時非常に感動しておられたと聞く。私が病床に先生を訪れた時、「君に約束した *international commercial law* の研究の口火が、これで切られたと思ってくれ」と、希望にみちた感懐を洩らされた。この意味では先生は、業半ばにして世を去られたのだと思う。返すがえすも残念でならない。

いまここに、先生にゆかりのあるわれわれ、そして先生最後の職場の同僚であり、友人であるわれわれが、先生の在りし日の温い指導と友情を愧びつつ、一筆一筆に心をこめて、日頃の研究成果を草し、この追悼の書を編んだ。われわれは、この論集が、先生に捧げるに値いするものであることを念願する。われらの良き先達であり、良き友であった武市春男先生よ、先生のみ霊の前に、われら一同、謹んでこの追悼の書を捧げまつる。いまはすでに、天上にあって、われわれを見ていて下さるであろう武市先生は、必ずや本懐の笑をたたえつつ、喜んでこの追悼の書をお受け下さることを信じるものである。

昭和51年9月

城西大学経済学会会長 望月敬之